広報

小田原

まちづくり情報誌

city of odawara public relations

11 2006 NOV /1日号

【特集　高齢社会】

いつまでも、元気に生きる。

「高齢社会」。最近、この言葉を耳にしない日はありません。
私たちにとって、目前に迫った最も大きな課題の一つです。
では、その高齢社会を私たちはどうイメージすればよいのでしょうか。
働き手が少ないなど、不安材料の多い世の中なのでしょうか。
本来、「長生き」は人類共通の願い。
それを実現するために、私たちはあらゆる努力をしてきたはずです。
せっかく実現した「高齢社会＝長寿社会」なのに、
ともすれば暗いイメージでとらえられてしまうのは、どうしてなのでしょうか。
社会制度や仕組み、また、少子化などその要因はさまざまですが、
今回の特集では、個々が「老い」をどうとらえ、
高齢社会をどう生きるか、という問題について考えてみたいと思います。
命あるものには、訪れる「老い」
ならば、それと積極的に向き合い、
楽しくつきあっていくことはできないものでしょうか。

そもそも高齢者は何歳から

皆さんは「高齢者」というとどれくらいの年齢のかたを思い浮かべますか。60歳、それとも70、80歳でしょうか。

人間には個人差があるので、「自分は」「周りの家族は」と考えたとき、何歳からが高齢者だと線引きをすることは難しいと思います。

よく、65歳以上が高齢者という話を聞きますが、国にも高齢者というはっきりとした定義はなく、国際連合での報告などをもとに、目安として65歳以上を高齢者としています。

加速する高齢化

高齢者の定義がはっきりとしていないのに、「高齢社会」といわれてもピンとこないかもしれません。

しかし国連や国では、65歳以上の人口が総人口にどれくらいの割合を占めるかという、「高齢化率」の数値をもとに高齢者の多い社会を三つに分類しています。高齢化率が7パーセント以上14パーセント未満の「高齢化社会」、14パーセント以上21パーセント未満の「高齢社会」、そして21パーセントを超えると「超高齢社会」となります。

これを実際の人口に当てはめ

てみると、昭和45年に「高齢化社会」となる7.1パーセント、平成7年には「高齢社会」の14・5パーセント、そして平成17年は20・99パーセントと「超高齢社会」も目前となっています。

ちなみに、高齢化率が7パーセントから14パーセントに上がった年数を他国と比べてみると、フランスが115年、スウェーデンが85年、ドイツが41年に対し、日本は24年と、世界でもまれなスピードで進んでいるのです。

小田原の状況は

国ほどのスピードはありませんが、小田原も国と歩調を合わせるように、高齢化が進んでいます。市が高齢化社会になったのは昭和49年、国から遅れること4年でした。

そして、高齢社会となったのが平成8年、超高齢社会になるのは平成19年ごろと予想されています。

小田原にも高齢化の波は着実に押し寄せているのです。

高齢社会をどう迎えるか

市が思い描く理想の高齢社会は、高齢者が老いても楽しく暮らせる社会です。

そのため、市では高齢者福祉の方向性を示した「おだわら高齢者保健福祉介護計画」を定めています。

地域全体で高齢者の生活を支え、地域も高齢者の経験や知恵を生かして支えられ、社会が活力に満たされる。そして高齢者が心身ともに健康で、安心して生活を送ることができる社会、これがその計画の中で理想とする高齢社会であり、小田原の目指す社会でもあるのです。

わがまちの対応

そこで、市では、「生きがい」を持って暮らしていただけるよう、老人クラブやシルバー大学など、社会参加や生涯学習などへの支援をしたり、健康で暮らしていただこうと、メダカやお猿のかごやなど、小田原をイメージできる動きを取り入れた、全身を使う体操「市民体操おだわら百彩」を作ったりしています。

また、高齢者の皆さんが身体的に厳しい状態や、介護が必要な状態になっても生活に困らずに安心して暮らせるよう、介護保険のサービスはもちろん、介護保険のサービスにはないけれどあった方が便利なサービスなど、計画的に福祉サービスを充実させています。

さらに、市役所や駅など、皆さんがふだんよく使う公共施設のバリアフリー化を進めるなど、だれにでも優しいまちづくりへ向けた取り組みを進めています。

高齢社会は、高齢者の皆さんのパワーが加わって初めて元気なまちになるのです。

皆さんが「生きがい」を持って明るく暮らすことで、多くのかたが「小田原に住んでいてよかった」、「小田原は高齢者にも優しい」と安心していただけるよう、これからも、高齢者とともに生き、ともに手を携えて暮らせるまちを目指していきます。

高齢社会への対応は市だけではなく国民全体で考えなければならない問題です。

あらゆる年代のかたが安心して暮らし、高齢社会でも困らないように、皆さんにも常に社会に関心を持っていただきたいと思います。

そして、社会のシステムが高齢社会にふさわしいものとなっているかをみんなで考え、必要に応じて修正し、適正なものとしていくように心掛けていきたいと考えています。

いつまでも元気に生きるために、先人の知恵も借りながら、じっくりと考えていきましょう。

市民体操おだわら百彩

高齢者の筋力向上トレーニング

Special Issue
an aging society

今年1月で100歳を迎えた
永塚にお住まいの平野トヨさん。
上曽我で明治39年（1906年）に生まれ、
以来100年間小田原で暮らしている
生粋（きっすい）の小田原っ子です。
二つの世界大戦や関東大震災など、
さまざまな出来事を乗り越えてきたトヨさん。
その一世紀に及ぶ長い人生には、
どんな物語があるのでしょう？
そして、その言葉の中には、
私たちが「高齢社会での生き方」を考えるうえで、
大きなヒントがあるのではないでしょうか。

老いてこそ見える、大切なもの。

平野トヨさん100歳 自分の道を振り返る

1日のほとんどをこの部屋で過ごしているそうです。「新聞は毎日読んでるから世の中のこともちゃんと知っているよ」。思い出の写真がトヨさんを見守っています。

孫が12人、ひまごが22人

トヨさんは昭和2年（1927年）に結婚し、2男4女をもうけました。孫は12人、ひまごは22人います。現在は、息子さん夫婦、お孫さん夫婦とともに、9人の大家族で暮らしています。トヨさんを筆頭に、子ども、孫、ひまごと全員が集合したら、学校の教室がいっぱいになるほどの人数。人が生きるということは、かかわる人が増えていくことでもあるのです。

100歳というと、体もだいぶ不自由になられたかたを想像しがちですが、トヨさんは、「耳が遠いから、自分の声もよく聞こえないんだよ。だから、声も大きくなっちゃう。うるさかったらごめんね」と笑う、とても元気なおばあちゃんです。

確かに目や耳などに衰えはありますが、もともと丈夫な体なのでしょう、大きな病気はほとんどしたことがないとのこと。病気というと、7年前に飲んだ薬が強すぎたのか、胃を悪くして入院したことがあるだけ。「手術って聞いて、心配でね。先生にいつやるんですかって聞いたら、もう終わりましたって。寝ているうちに治してくれたの。お医者さんはすごいね」とトヨさん。

食事も和食を中心に、好き嫌いなく必ず三度取っているそ

うです。朝食を取らないなど不規則な食生活が問題となっている現代社会。規則正しく食べることの大切さも教えてくれました。そして、インタビューを通して笑顔だったトヨさん。きっと、それも健康のひけつなのでしょう。

つらいことはたくさんあったよ

「何を話せばいいの」と言いながら、まず最初に口に出たのは苦労話でした。

一人娘で、大切に育てられたというトヨさん。80年以上も昔に裁縫を習っていたようなお嬢さんが、急に右も左も分からない農家に嫁いできたのですから、苦労は絶えませんでした。

結婚した当時は「嫁しては夫に従い、老いては子に従う」ことが美徳とされていた時代ですから、常に「忍耐」という言葉が女性について回っていました。それだけに、つらい話は嫁いできたころに集中します。

「50年くらい前は、この辺りでも養蚕をやっている農家が多くてね、うちもやっていたの。桑の木を切って毎日運ぶんだけど、これが重くてね。家では家族に気を遣って大変だし。頼りたいおじいさんは勤め人だったから、昼間は家にいないでしょ。毎日、毎日、泣いていたよ。本当につらい時代だったよ。嫁はすべてをやることが当たり前だったからね」

人生の大きな転機そして、世代交代

苦労の日々が続いていたトヨさんにも、人生の転機が訪れます。「お嫁さんが来てからは、ずいぶんと楽をさせてもらっているよ」

それは、いつもトヨさんの傍らにいる俶子さんです。

平野家にはなくてはならない人、俶子さんと。

「これでもね、いろいろ大変なのよ」と笑う俶子さんですが、話はそれほど単純なものではないようです。元気だとはいえ、かなりの高齢者であるトヨさんの世話のため、自分の時間はないに等しいそうです。

「少しでも自分の時間があるのなら、外に目を向けたいと思いますよ」としみじみ語る俶子さんは69歳。ご自身も孫のいるおばあちゃんですが、トヨさんから見ればいつまでも「若いお嫁さん」なのです。

「ひいおばあちゃんを一人にするわけにはいかないでしょう。めったに留守にはしませんが、ちょっとしたお買い物でも気を遣いますよ。でもね、家族もみんな同じなの。例えばね、ひいおばあちゃんは心配性だから、繰り返し同じことを聞いたりするんですよ。でも、家族のみんながひいおばあちゃんの性格を分かってるから、うるさがらないで静かにすなおに聞いてるの」とトヨさんを優しい目で見ながら話す俶子さん。家族のことをよく理解しているようすが分かります。きっと俶子さんが、9人の大家族を支える縁の下の力持ちなのでしょう。かいがいしい俶子さんの姿を見ていると、家族のために年を重ねていった人生が見え隠れします。自分の人生を振り返るとき、その心中には複雑なものがあるのかもしれません。

「戦前の美徳」が生きていたころのお嫁さんは、俶子さんの世代が最後になるでしょう。世代交代の一つの形が終わろうとしています。

若いころのトヨさんです。
80年も前にこんな写真を撮影しているなんて、本当にお嬢さんだったのですね。

「100歳のかたがどんな考えを持っているのか」ということを取材に来たのですが、いつも高齢者のそばにいるかたにしか分からない苦労があるということを、短い時間でも感じ取ることができました。それは、嫁・しゅうとめという関係から生まれるものではなく、「介護」という形で、多くの人がこれからもかかわっていくものなのでしょう。

こんな話をしていると、横からトヨさんの声が聞こえてきました。

「あんたたちが何を話しているのかよく聞こえないけど、あたしは、この人には感謝してるよ」。このあとも、幾度となく「この人には感謝してる」と言っていたトヨさん。「家の者がよく世話をしてくれるので、こうして毎日楽しく暮らせるの」としみじみ話している姿が印象的でした。

家の者がよく世話をしてくれるので、こうして毎日楽しく暮らせるの。

100歳を迎えた今、大切なものが見えてきた

何よりも大切なことは、日々の暮らしの中にある幸せ。

20年ほど前に、今は亡きおじいさんと一緒に出場した、ゲートボールの試合での1コマ。伊香保温泉が会場で、決勝戦まで行った思い出の写真です。
一番左がおじいさん、左から3人目がトヨさん。

今年の1月、長寿のお祝いに訪れた小澤市長と緊張ぎみのトヨさん。

100歳のお祝いに集まった親族。この日に来られなかった人が10人以上いるそうです。
トヨさんから、こんなにもたくさんの人たちが命をもらっているのです。

こんな世代交代も

昔は老人会の行事に楽しく参加していましたが、90歳を過ぎたころから体のことを考えて、無理をしないようにしているとのこと。

「10年くらい前までは、ゲートボールが盛んでね。おじいさんとも一緒によくやったのよ。10人くらい仲間がいたんだけど、最近の若い人はゲートボールをやらなくなったらしくて、寂しいですよ。世代が違うのね。同世代の人がいなくなっちゃったからね、私の出番はないよ」とトヨさんの言う「若い人」は「70歳くらいの人たち」

どの世代にも交代劇はあるのですね。

楽しかった思い出

苦労話のあとには、楽しい思い出話に花が咲きました。

「亡くなったおじいさんたちと旅行したのが一番の思い出だね。沖縄には2度も行ったし、九州にも、北海道にも。そうそう、ハワイにも行ったことがあるよ。りっぱな部屋でね、こんなところに泊まるのはもったいないって言ったら笑われちゃってね」と楽しそうに話すトヨさん。

「一番よく出掛けたのは、今から30年くらい前かな。ゲートボールの試合でおじいさんと遠くに出掛けたこともあるよ。体がよく動いたころは、いろんな所へ行けて楽しかったね」

部屋にはおじいさんと撮った写真や、孫やひまごが生まれたときの写真があふれています。

「この写真がおじいさんで、あの写真は今、高校生のひまごだよ」と一つ一つ説明してくれます。きっと、楽しい時間は今も流れ続けているのでしょう。

ひまごとの楽しいひととき。何よりも大切にしたい時間です。

100歳の笑顔は、
こんなにも愛らしいのです

趣味は俳句

若いころと比べれば、確かに体は動かなくなってきました。でも、頭は今でもよく働きます。「好きなことは俳句だね。先生が10年ほど前に亡くなったから、老人会の句会にも出なくなったけれど、自分の頭の中でよく詠んでるよ」と語るトヨさん。最近のお気に入りの句を幾つか紹介してくれました。

「市長さんが長寿のお祝いのときにわざわざいらしてくれてね。そのときに詠んだのが『身はここに　心は雲上　幸の日々』っていうの。市長さんもこれがいいって言ってくれたけれど、本当はね、もっと好きな句が二つあるの」といたずらっぽく笑います。それは、楽しくも人生を考えさせられる句でした。

「『ふるさとの　生み育てしの　父母偲ぶ』。毎日思ってることを俳句にしたの。100年も生きられる体に生んでくれた、お父さんとお母さんに毎日感謝してるのよ」

100歳のおばあちゃんが、自分のお父さんとお母さんに今でも感謝しているという姿には、感動を覚えました。幾つになっても人はだれかの子ども。生み、育ててくれた親に感謝する気持ちを、100年という年月が流れても忘れてはいないのです。そして、どんなに時間がたとうとも、忘れてはいけないのです。

「もう一つはね『何事も　良く解釈の上　100年を』という句。100年も生きていると、嫌なこともたくさんあるの。でもね、そういうことも自分のためになることだって、自分にいいように考えるの。そうしていたらね、100年生きてたって意味よ」。今日一番の大きな笑い声が響きました。

ひまごの笑顔が私の生きがい

俳句よりも、話に熱が入ったのは、同居するひまごさんたちの話になったときです。トヨさんのことを「大きいおばあちゃん」と呼ぶ、高校3年、1年、中学3年、小学6年のひまごさんたち。

「ひまごたちが、毎日話し掛けてくれるの。学校へ出掛けるときもね、手を振って『大きいおばあちゃん、行ってきます』って言ってくれるんだよ。うれしくてね。あたしは毎日みんなが無事に帰ってきますようにって、仏様に手を合わせるの。仏様にお願いすることはそれだけ」と、手を合わせるしぐさのトヨさん。

「塾で夜が遅いときも、ちゃんと起きて待ってるの。よく、帰ってきたひまごたちがあたしを見てね『大きいおばあちゃん、もう寝てるよ』って言うけどね、違うよ。目はつぶってるけど、ちゃんと起きてるんだから」

子どもたちには寝ているように見えても、大きいおばあちゃんは起きているのです。なぜなら、子どもたちの帰りをだれよりも楽しみに待っているのは、そして子どもたちの笑顔をだれよりも楽しみにしているのは、大きいおばあちゃんなのですから。

日々の暮らしの中にある幸せ。日常の何げないひまごとのふれあいが、トヨさんにとっての「生きがい」なのでしょう。何よりも大切なことは、身近にあります。あなたはそれを見過ごしていませんか。

一番の生きがいは
ひまごたちの笑顔。それが、
何よりも楽しみ。

話のネタになる 豆知識

トヨさんが生まれた1906年とは、こんな年でした

- 第1次西園寺公望内閣が成立
- 鉄道国有法が施行
- 夏目漱石が「坊ちゃん」を発表
- 東京・上野に日本初の国立図書館として帝国図書館（現・国会図書館上野支所）が開館

トヨさんと同じ年に生まれた有名人

坂口安吾（作家）、杉村春子（俳優）、本田宗一郎（本田技研創業者）など

ふるさとの森づくり事業

社会は支え合い

トヨさんはとてもお元気ですが、年齢を重ねることで肉体は衰えていきました。特別な運動をしていたわけではありませんが、若いときには農作業、そして90歳くらいまではゲートボールをしていました。旅行などの楽しい思い出は、体がよく動いていた時期に多いようです。

体が思いどおりに動く。この普通のことが、どれほどありがたいことなのかは、それを失ってから気がつくのかもしれません。

運動を続けることで、ある程度、肉体の衰えは防げるといわれていますが、それにも限度があります。無理をしすぎては逆効果になりますし、適度な運動をしていたとしても若いときのままということはありません。

肉体が衰えると難しくなってくるのが身の回りのこと。

そこで必要となるのが地域や家族など、身近なかたの手助けと、介護保険などの公的な介護サービスです。

「老い」をよりよく生きるキーワード

支え合うこと、伝えること そして、生きがい…。

平野さんの100年。それは決して平坦なものではなかったようです。
そして、平坦ではなかったことに、意味があるとも…。
その平野さんを支える、まるで社会の縮図のようなたくさんの家族とその結びつき。
そこに人生をよりよく生きるいくつかのヒントがありました。
その、「高齢社会を生きていく手掛かり」について考えたいと思います。

人は一人きりでは生きていけません。高齢社会では、特に人と人とのふれあい、支え合いが重要になります。

世代交代が社会に与える影響

平野さんの家庭では、かつてトヨさんが家庭の中心でした。それがお嫁さんの俶子さんが来てからは家庭のことは俶子さんが中心に行うようになりました。

また、老人会でも話の合う同世代の仲間が減ってきたという話がありました。

この世代交代はトヨさん周辺だけの特別な話ではなく、どこにでもある話です。そして、日本の社会でも同じことがいえるのです。

日本の高度経済成長期を支えてきたいわゆる「団塊の世代」が、2007年ごろから続々と定年退職していきます。この世代が企業などから抜けることで発生する弊害を2007年問題と総称していますが、これも簡単にいえば「後継者問題」です。

後継者の問題は、今に始まったことではありませんが、今後さらに顕著になっていくことでしょう。退職される皆さんが長年培ってきた知識や技術、これらがしっかりと次の世代に引き継がれないと大変なことになります。

古い世代が舞台を降りれば、次の世代が登場しなくてはなりません。

また、舞台を降りた古い世代は、次の舞台に登らなければなりません。この現実にも、正面から取り組まなくてはならない時期なのです。

三つのキーワード

トヨさんは、ひまごの笑顔が一番の楽しみと話されていました。その笑顔を見ることが「生きがい」だと。「生きがい」というのは生きる喜びや幸福感など「気持ち」の一つ。つまり、気持ちの持ちようで人生が変わるということです。これはトヨさんの詠んだ俳句からも感じることができました。

「病は気から」ということわざがあります。「病気は気の持ちようで重くも軽くもなる」という意味です。科学が発達していない昔でも、病気に与える心の関係が分かっていたということでしょう。いや、むしろ心の持ちようが重要と考えられていたのかもしれません。

これは、今でも皆さんの人生にかかわっています。「生きがい」があれば気持ちが前向きになり、生きている幸せを感じられる。満ち足りた心でゆったりと暮らしていけるのです。

高齢社会を迎えるときに、どうしても必要な「支え合い」、越えていかなければならない「世代交代」、そして楽しく生きるために必要な「生きがい」

この三つが、とても大切なキーワードだと考えました。

次のページから、介護を勉強する大学生や、伝統工芸を継承するかたのお話を伺いながら、このキーワードの持つ意味を探ってみたいと思います。正解はないかもしれません。皆さんで考え、感じてください。

「高齢者」を体験する！

80歳になったときの体力は、20歳のときに比べると、筋力、歩行スピードは40パーセント、柔軟性は80パーセント、そして持久力は60パーセントも落ちるといわれています。
そうはいっても、言葉だけでは実感できません。
社会福祉協議会では、高齢者の体力を体験するための装具を使って高齢者の「加齢疑似体験」ができます。
興味のあるかたは、お問い合わせください。
社会福祉協議会　☎34-3225

データでみる小田原

支援や介護が必要な高齢者の推移

※各年度とも10月1日現在

要支援・要介護認定者は、平成17年10月現在で5,396人です。
これは、介護保険制度創設時（平成12年度）の1.78倍に当たります。特に、軽度の認定者の増加が際立っています。

小田原市の高齢化率の見通し

※各年度とも10月1日現在

総人口のうち、65歳以上の高齢者の占める割合です。平成13年から平成19年の間に約8千人増加する見通しです。
特に75歳以上の高齢者の増加が顕著で、約5千人増加する見通しです。

座談会　学生たちが語る
支え合いの最前線へ

充実した老後を生きるためには、周囲の人々との結びつきは欠かせない要素のようです。この春、小田原に開校したばかりの国際医療福祉大学は、これからの日本の抱える大切なテーマ「福祉」を学ぶ学校です。その学校で介護などを学んでいる学生たちに登場していただきました。看護師・保健師・理学療法士・作業療法士など、まさに「支え合い」の最前線を目指す皆さんに、「自分たちの夢と生きがい」というテーマも併せてお話を伺いました。

この道を選んだのは

長谷川　もともとのきっかけは、難病の祖父を助けたいという思いからでした。その祖父が亡くなった後、進路に迷ってしまい、思い切って親に打ち明けたら「おじいちゃんのような人はたくさんいる。世界を広く見なさい」とアドバイスを受けて、決心しました。

小室　昔から、医療関係の仕事に就きたいと思っていたんです。でも、機械を扱うのはちょっと苦手なので、自分の手を使って働けるものがよくて、作業療法学科を選びました。祖母の体が悪くて、思うように動けないという状態を目の当たりにして、人の役に立ちたいと思ったんです。

天野　小学生のとき、障害者の施設を見学したのをきっかけに、福祉の仕事に興味を持ちました。高校で病院見学をしたとき、作業療法士が生き生きと楽しそうに仕事しているのを見て、これだと思いました。

大友　高校時代、部活でバスケットボールをやっていましたが、ひざや足首のけがが絶えず、亀裂骨折したこともありました。そのとき、患者と理学療法士が二人三脚でリハビリを行うことに興味を持ったんです。親が医療職ということも大きかったですね。

大島　自分も同じですね。小学生のころからサッカーをやっていて、リハビリに興味があったんです。

医療の現場にふれて、思うこと

大島　実際に現場に行ってみて、作業療法士は大変だと改めて感じましたよ。特に病院はリハビリ室だけじゃなくて、血圧測定のために病室へ行くこともありますし、仕事の幅が広いんです。実は、実習に行ってから、自分が変わったと思うことがあるんですよ。お年寄りのことが気にかかるようになったんです。例えば、夜中に救急車のサイレンを聞くと「どこかのおばあちゃんかなあ。大丈夫かなあ」なんて思うんですよね。

天野　作業療法士はリハビリだけやっているのかなと思っていましたが、施設に行ったら体を起こすことから下のお世話までしていたので、やはり範囲が広い仕事だなと実感しました。

小室　老人保健施設には正直言って暗いイメージを持っていたのですが、実際に行ってみると、皆さんお元気でビックリしました。仲間がたくさんいる楽

理学療法学科1年
大友 将男（ゆきお）さん

理学療法学科1年
長谷川 真美さん

作業療法学科1年
大島 貴彦さん

作業療法学科1年
小室 佑介さん

作業療法学科1年
天野 友美さん

作業療法学科助教授
山路 博文さん

しいところに入ってきたってイメージをお持ちになっているんですね。「お兄さん頑張ってね」と励まされたこともあって、うれしかったです。

大友　現場を知って、自分の進む道へのやる気が高まりました。病院は高齢のかたばかりでしたが、暗いイメージとか重たい気分にならなくて、むしろその逆でしたね。これから高齢社会になるっていわれているだけに、自分が今勉強していることって、将来役に立つことだよなって改めて実感しました。

長谷川　認知症のかたなど、いろいろなかたがいらっしゃいました。60歳代から80歳代までと年齢もさまざまでしたが、昔からおじいちゃん子、おばあちゃん子だったので、高齢のかたに囲まれても違和感がないというか、壁のようなものは感じなかったんです。この仕事、続けられそうだなって思いました。

よく分からないけど、これが「生きがい」なのかも

大友　受験勉強はつらかったけど、今の勉強はすごく楽しいです。自分の進む道に向かっての勉強だからでしょうけど、未知の世界への興味っていうのかな、もっともっと知りたいって思いますね。理学療法士の道を選んで、よかったって心から思います。

小室　作業療法士の仕事は、人の生活にまで入ります。その人を幸せにするための仕事なんですね。そんなすごい仕事ができるのです。よく分からないけど、それが「生きがい」になっていくのかもしれません。

長谷川　生きがいとは違うかもしれないけれど、好きな音楽を聴くのが楽しい。勉強の合間に聴くと、やっぱり好きなことをしてるときは幸せだなあと感じます。

大島　「生きがい」と、改めて考えてみると難しいですね。

　昔のサッカー仲間とたまに会うと、お互い分野の違う世界にいるから学校の話などはしないのですが、楽しい時間を過ごせるんですよ。サッカーをやるのも、ただ単純に好きだからです。こういった「好きなことをやっている時間」も大切だと思います。

天野　食べたい物は食べる、趣味でも何でも自分がやりたいことをやる。当たり前のようですがそれが「生きがい」ではないかと思います。お年寄りのかたも同じ。だから好きなことができるようにサポートしてあげたいと思っています。

それぞれの思いを持って入学してきた5人。はにかみがちに話す言葉の中に、抱いている夢が感じられました。

座談会が終わった後、学生を見送りながら、山路助教授が優しいまなざしでこう話してくれました。

「今日の学生たちは、入学してからまだ半年しかたっていないんですよ。だから、将来像はまだ漠然としている者が多いはずです。これから実習などで、ますます厳しい現実に突き当たると思いますが、高い志を持って入ってきたのですから、社会に貢献できる人間を目指して『初志貫徹』で頑張っていってほしいですね」

私たちは、こんなことを学んでいます

理学療法学科では…
リハビリテーション医療のうち、身体運動機能の専門家である「理学療法士」になるために学んでいます。スポーツリハビリを目指す学生が多い傾向があります。

作業療法学科では…
病気やけがなどで後遺症が残り、心身の機能がだんだん低下していく人などの生活を立て直す手助けをする、「作業療法士」になるために学んでいます。

柏木五郎さん82歳 伝える喜び

今なお輝いています 経験は、引き継ぐものだから

絶えることのない命のリレー。
培われた経験や知識、技術を次世代に引き継ぐことは、私たちの使命であり、大きな喜びでもあります。
長い人生を経たからこそ味わうことのできるこの喜びを、実感している人がいます。
戦国時代までさかのぼる歴史を持つ伝統工芸「鋳物」の達人、柏木五郎さんは、
自らが身に着けた優れた技を後進に伝えることに、今、生きがいを感じています。

兄弟で伝統を受け継ぐ

柏木五郎さんは、長男の一郎さんを中心に兄弟4人で鋳物を作っていました。面白いもので、それぞれ得意なものがあったそうです。花器や鈴が得意な一郎さん、茶道具や仏鈴が得意な二郎さんと四郎さん、そして五郎さんはシンバル。伝統工芸品ではなかった五郎さんの作るシンバル。試行錯誤の末、その音色は世界的な評価を得るまでになりました。

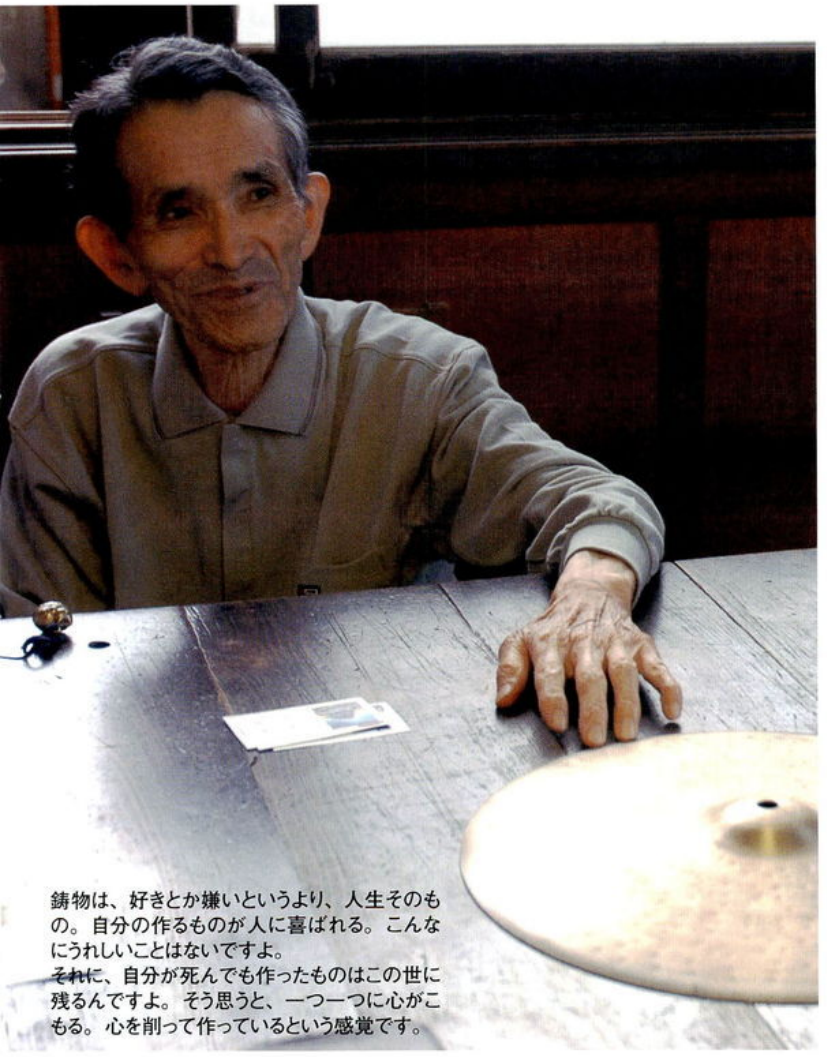
なぜ、シンバルなのか

黒沢明監督が、映画「赤ひげ」の風鈴が鳴り響くシーンで、鳴りのよい柏木鋳物の風鈴を指名したという逸話のとおり、柏木家の作る鋳物は鳴り物で有名でした。

その秘密は、材料にあります。通常、鳴り物は真鍮で作りますが、柏木家では砂張と呼ばれる銅と錫の合金を利用しています。響きはよいのですが、硬くてもろく、鋳造や加工がとても難しい。柏木家はそれを克服しています。

シンバルを作ることになった経緯を、五郎さんは次のように語ってくれました。

「日本管楽器（1970年にヤマハと合併）という会社から、『海軍軍楽隊がシンバルが使い物にならないから作ってほしいと言っている、どうにかならないか』と依頼があったんですよ。でも、だれも作ったことがない。日本中探しても、きちんとしたシンバルを作った人なんていないのですから。それなら、自分が作ろうと思ったんです」



鋳物は、好きとか嫌いというより、人生そのもの。自分の作るものが人に喜ばれる。こんなにうれしいことはないですよ。
それに、自分が死んでも作ったものはこの世に残るんですよ。そう思うと、一つ一つに心がこもる。心を削って作っているという感覚です。

鋳物作りで最も緊張するのは、「湯」といわれる合金を溶かしたものを型に流し込む瞬間。特にドラは難しく、注ぐ勢いが強すぎるとすぐ穴が開いてしまったそうです。「湯を注ぐときは真剣勝負」と五郎さんは教わりました。

不器用だからこそ、できた

五郎さんは、兄弟の中でも研究熱心でした。

「よい鋳物を作るために、あらゆることを試しましたよ。教科書どおりではうまくいかないことはたくさんありました。教えてくれる人もほとんどいない世界だから、自分でやってみなくてはならないんですよ。鋳物の常識では考えられないことを試して、初めて見つけられることもたくさんありました」。こんな性格ですから、だれも作ったことのないシンバル作りに熱中しました。そして、もう一つ夢中になる理由があったのです。

「お前は不器用だから、鋳物には向いていない。ほかの道を探したほうがいい」。若いころ、兄の一郎さんに言われた言葉です。

「兄は手先が器用で、鋳物の型などを上手に作っていました。あれは確かに自分には無理だろう。でも、シンバルなら作れるかもしれない」

兄弟より不器用だからこそ、研究に没頭でき、新しいシンバルという分野にも手を出すことができたのでしょう。マイナスと思われることを考え方一つでプラスに転じたのです。シンバル作りで鍛えた腕と知識と経験は、ほかの鋳物作りにも生かされました。

年齢を重ねて感じること

鋳物一筋で生きてきた五郎さんですが、年齢とともに迫ってくるものを感じるときがきました。それは「人はだれもが老いる」という現実です。

「鋳物作りは体力が必要です。シンバルを作るのに、『ろくろ』を使っていたんですが、金属を『ろくろ』で削るのは、かなり力がいるんですよ。気がついたら、腰もひじもボロボロになっていましたよ。もうおれも年だ、思ったようなものが作れなくなると思ったから、すっぱり辞めることにしました」。職人の潔い引き際です。

「経験は年とともに積み重なって、よりよいものを作るための感覚は鋭くなっていくんだね。でも、それに体力がついていかなくなったから、辞めたんですよ。自分の跡を継いだのは、ベテランだったから、特に教えることはありません。工場から時々教えてくれと声がかかって、顔を出すことはあったけど、年に数回ですよ。自分ではできないくせに、口ばっかり出すって思われるのは嫌でしょう?」

しかし、最近そのようすが変わりました。去年、五郎さんの孫の世代に当たる照之さんが跡を継いだのです。照之さんは28歳という若さ。五郎さんをして「あの子はとても研究熱心ですよ」と言わしめる照之さんは、「鋳物の作り方は、型を作るときなどに新しい技術がありますが、基本的に昔から変わっていません。だから、五郎さんに学ぶことは多いのです。昔の研究ノートを見ると、研究する必要があると思ったことは、すでに試されていたということがあります。かなり多くのことが研究されています」と、積み重ねてきた歴史の深さを語ってくれました。

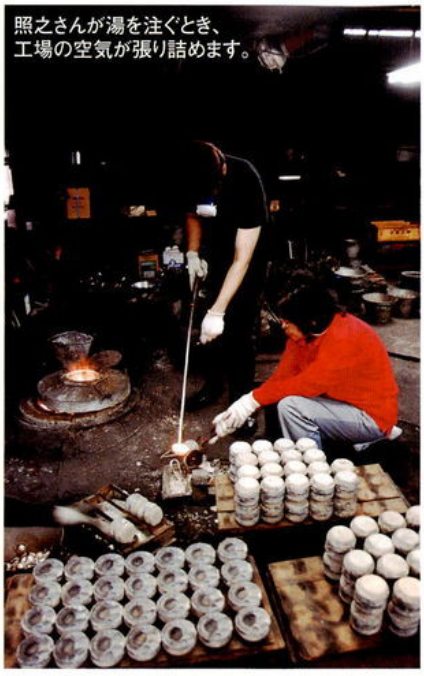
後に続く人たちへ

鋳物を作ることだけでなく「後進」を作ることにも力を注ぎました。

「自分一人でやっていては、後に続く者もできないし、自分も楽にならないでしょう。だから『自分の代わりをいつでも置く』というつもりで指導していました。商売という側面もありますから、一週間の経験でも品物を作ることができる方法を考えましたよ」と鋳物を作る五郎さんとは別の、経営者としての言葉もありました。

「教えるときには、『何しろやってみろ』とよく言いました。同じことを何度も何度も繰り返す。これはとても大切なことです。自分は、シンバルを持っただけでその重さがグラム単位で分かるほどになりましたよ。失敗してもいいから、やってみるんです。失敗しないで作れるわけはないんですから。何度も作ってみて、それでもだめだったら、教えるんです」若い人が継いだから、工場へ来る機会も増えているようです。

「教えてくれと呼ばれると、そりゃうれしいですよ」と笑顔になります。五郎さんは、新しい「生きがい」を見つけ、今とびきり輝いています。



照之さんが湯を注ぐとき、工場の空気が張り詰めます。

小田原の伝統工芸「鋳物」

国内はもちろん、国外でも高い評価を受けている小田原の鋳物の歴史は古く、戦国時代には北条氏の庇護を受けて、盛んに作られていました。

お話を伺った柏木五郎さんは中町にある「柏木美術鋳物研究所」で鋳物を作り続け、10年前に引退。今では後進の指導に当たっています。優れた芸術性と高い技術を併せ持つ小田原の鋳物の歴史をしっかりと受け継ぎながら、さらにそれを発展させた匠の技を追求しています。

高齢社会は心構えで乗り切ろう
さあ！「生きがい」探しへ

ここまで「支え合い」「世代交代」「生きがい」というキーワードで、さまざまなかたのお話を伺ってきました。そこで共通していたことは、皆さんにそれぞれ「生きがい」があったことです。「生きがい」って何でしょう。あなたには「生きがい」がありますか。

世代交代と世代を越えた支え合い

近年、「核家族化」「地域の希薄化」という言葉をよく耳にします。ともに家庭や地域の変化を表していますが、ここには大きな問題があります。核家族は両親と子どもだけの世帯ですから、社会に老夫婦や高齢者一人だけの世帯が多くなっていることを、そして、地域の希薄化は地域内での支え合いの輪が小さくなっていることを意味しているからです。

人が生きていくためには、さまざまなかたの手助けが必要です。特に、高齢者ともなれば、体に無理が利かなくなるので、その傾向は一層強まり、家族や地域が一体となった支え合いが必要になります。

しかし、高齢社会では、高齢者を支える家族や地域のかたにも高齢化の波が訪れるのです。だからこそ、円滑な世代交代はもちろん、世代を越えた支え合いがとても重要になります。

そこで、まず高齢者の皆さんは、先ほどの「福祉」を学んでいる学生たちなど、地域の若者とも積極的に交流を深め、「柏木さんの鋳物技術」のように、長年の経験で培った技術や知識を次世代に伝え、着実に支え合いの輪を広げましょう。そして、地域のかたがたも地域内での交流を深め、一体となって高齢者を支えていくという意識を持ちましょう。

三世代交流グラウンドゴルフ

これらがうまくかみ合うことで、支え合いの輪に入ってくれた若者にもやりがいや生きがいを感じてもらえるはずです。

これからも安心して暮らしていくためには、未来へ向けた新たな取り組みが必要なのです。

そして、生きがい探し

皆さんは、ちょっとしたときや夜寝る前に、ふと「明日は何をしよう」とか、「これから忙しくなるな」などと考えることはありませんか。

家族や友人のことであったり、仕事や趣味のことであったりと、人それぞれ内容はさまざまでしょうが。明日へ、未来へ思いを馳せて考えること、それも「生きがい」の一つです。

今まで仕事しか考えてこなかったから、明日からやることがないな、「生きがい」はないなと思っているかたもいるかもしれません。

しかし、早朝にちょっと散歩に出掛けてみたら朝のすがすがしい空気を気持ちよく感じたり、ごみ出しをしている近所のかたと会ってあいさつを交わしたりする、これも見方によっては「生きがい」の一つになるかもしれません。

「寝起きにはさわやかな空気を味わいたい」とか、「あいさつを交わすときの笑顔が楽しみ」という気持ちになればそれは間違いなく「生きがい」なのですから。

つまり、「生きがい」は無理をして探すものではないのです。例えばトヨさんのように家族の笑顔を見ることであったり、五郎さんのように「鋳物」であったりというように、本当に身近にあるものなのです。国際医療福祉大学の学生は、「好きなことをやっている時間が大切」と、分かりやすい言葉で表現していました。

何事も積極的に

トヨさんの話を思い出してみましょう。「ひまごの笑顔が生きがい」と話されていました。また、五郎さんも仕事から引退した後、孫の世代の人たちへ、その技術を伝えていくことが生きがいとなっています。今、生きがいとなっていることは、自分の体力などのピークを越えてからのものなのです。人生は、いつでもスタート地点に立てるということが、お二人の言葉からも分かります。何とも、元気の出る話ではありませんか。

しかし、「生きがい」が身近にあるからといって、自分だけの殻に閉じこもっていては見つけにくくなります。

特に、「生きがい」が見つからず、家の中に閉じこもってしまえば、体はもちろん、頭も心も使わなくなり、急速に「老い」が訪れてしまいます。そして、認知症になってしまうおそれすらあるのです。

だからこそ、高齢社会を生きるためには、自分と社会とのつながりを持つことが大切なのです。人とのつながりを大切にすることで、会話が生まれ、「どこかへ行きましょう」と外出するでしょう。そこから、「あれをしよう、これもしたい」という気持ちは自然と生まれます。

たとえ体が動かなくなって、介護保険などの福祉サービスを利用するようになっても、「福祉の施設に遊びに行く」、「施設に行けば友達がたくさんいる」と前向きに考えれば、それが最終的には「生きがい」につながっていくはずです。

高齢社会になるからといって身構えることはありません。たった一つを除いて今までの暮らしを変える必要は全くないのです。そのたった一つが意識の持ち方、そう、心構え。「生きがい」を持って暮らすことなのです。

そして、高齢社会は言い方を変えれば高齢者が多い社会なのですから、高齢者の力、シルバーパワーなくして社会を維持していくことはできません。

高齢者だからといって、社会の片隅で生きていくというイメージは捨てましょう。

さあ、新しい時代に向けて輝いていきましょう。

Special Issue
an aging society

行革レポート

行政サービスの品質向上に取り組みます！

～行政サービス品質向上（QC）運動～

9月にスタートした「行政サービス品質向上（QC）運動」の取り組みを紹介します。

問 行政経営室 ☎33１３０５

市では、「行革アクションプログラム」「市民満足度向上行動計画」「ゼロ予算事業」「市民の選択による予算配分システム」など、部局長を中心として組織ごとに行政サービスの品質向上に取り組んでいます。今回の「行政サービス品質向上（QC）運動」は、職員の当事者意識を高め、一人一人が主役となり、その積極的な意欲、取り組みにより推進するものです。

この運動は、「職員提案制度」と「業務改善提案活動」を二つの柱として成り立っています。職員提案制度は、部局の枠を越えた施策や事業の提案、業務改善提案活動は、担当部局の日常的な業務の課題を解決するための提案と活動です。

職員の自主的な創意工夫による取り組みと、これまでの組織を単位とした取り組みとを両輪として、今後もコストを抑え、効率的な行政サービスの品質向上に取り組んでいきます。

行政サービス品質向上（QC）運動

職員提案制度

- ○施策や事務事業への提案の反映
- ○所属の枠を越えた職員の柔軟な発想、自主的な創意工夫による提案
- ○若手職員の運営委員会（ヤングコミッティ）の設置
- ○単なる提案にとどまらず予算化、事業化

業務改善提案活動

- ○担当部局の日常的な業務の課題を改善する提案や活動
- ○業務改善の提案や活動を日常的に定着

おだわらインフォメーション

Odawara Information

Odawara Information

防災ひとくちメモ

全国的にも先進的な防災情報システム

～インターネットで安否を確認～

問 防災対策課 ☎33１８５５

大きな災害が発生したとき、その地域に住んでいる親戚や知人のことが心配になるのは、だれも同じです。しかし、ひとたび災害が発生すると、被災地域への電話が集中することでつながりにくくなり、連絡を取りづらくなるおそれがあります。

そこで、市ではインターネットを活用した防災情報システムを導入しています。これは、避難所に来たかたが、避難者カードに家族構成やけがの有無などを記入し、その内容を安否情報として公開するものです。

なお、具体的な番地は記載しないなど、プライバシーに配慮した公開内容になっています。また、避難所で必要なボランティアの情報を全国に向けて発信し、併せて遠方のボランティア希望者へ迅速に情報を提供できます。

このシステムは、「災害時相互援助協定」を締結している山梨県甲府市と栃木県日光市も導入しており、本市のシステムが万が一被災した場合でも、どちらかのシステムが使用できれば、情報発信・検索ができるようになっています。このシステムは、本市が企画して開発したもので、その先進性は企業などからも高く評価されています。

このシステムの内容は、市のホームページで見ることができます。

なお、携帯電話からも利用できます。

また、NTTがサービスを提供している災害用伝言ダイヤル（171）も災害時の情報提供手段としてご活用ください。

防災情報システムアドレス

http://www3.city.odawara.kanagawa.jp/bousai/

Odawara Information

おだわらの歴史をたどる

戦国時代や江戸時代、小田原城を中心に城下町・宿場町として発展した「おだわら」しかし、それよりもはるか昔から、この地では人々が生活を営んでいました。この長い歴史の足跡を広く市民の皆さんに理解していただくため、「おだわらの歴史をたどる」と題して、今年度も数々の文化財を公開しています。ここでは、そのうちの三つを紹介します。この機会に、私たちのまちの歴史に触れてみませんか。

問文化財課　☎33１７１７

●シンポジウム「戦国時代の小田原城を考える～八幡山古郭の保存と活用～」

戦国時代の小田原城は、現在の小田原高校がある辺りの八幡山が中心であったといわれています。その小田原城八幡山古郭の保存・整備について、今年、国指定史跡に追加された八幡山古郭東曲輪（くるわ）を中心として、専門家を交えて市民の皆さんとともに考えます。

【日時】11月26日㊐10時～16時30分
【場所】国際医療福祉大学５階大講義室
（入場無料・参加自由、定員２５０人）

●最新出土品展２００６「弥生時代から古墳時代へ」

平成17年度は、新聞にも取り上げられた早川石丁場群など、注目を集めた遺跡を多く調査しました。これらの遺跡を中心に、写真や発掘調査で出土した遺物を展示します。

また、近年発見が相次いだ、弥生時代終わりから古墳時代の初めごろの遺跡のテーマ展示も行います。

【日時】12月１日㊎～10日㊐９時～17時
【場所】かもめ図書館集会室（入場無料）

●平成18年 小田原市遺跡調査発表会

「最新出土品展２００６」で展示した遺跡の中から主要な11遺跡を取り上げて発表します。

これらの遺跡を調査した担当者が、スライドやパソコンを使って、分かりやすく説明します。

【日時】12月２日㊏10時～16時30分
【場所】かもめ図書館視聴覚ホール
（入場無料・参加自由、定員１８０人）

おだわらインフォメーション
Odawara Information

Odawara Information

「二宮金次郎物語」を販売

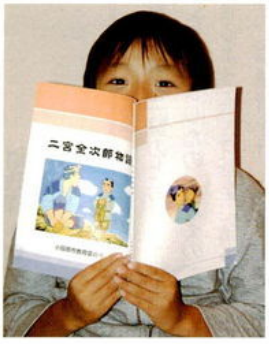
～学校の副読本を皆さんに～

問教育研究所　☎33１７２７

教育研究所が作成した「二宮金次郎物語」を、市役所と尊徳記念館で販売します。

これは、市内の小学生が二宮尊徳について学ぶときに使っている副読本で、尊徳の生涯や教えを、分かりやすく書いています。

内容の一部改定を機に、皆さんにも２００円で販売します。



市議会 9月定例会

補正予算や条例議案などを審議

総務課 ☎33129
財政課 ☎33131 2

市議会9月定例会は9月1日から10月5日まで開かれました。審議された主な内容は次のとおりです。

●専決処分の報告（事故賠償2件）
●専決処分の承認（工事請負契約の変更について「（仮称）小田原市消防署南分署新築工事」）
●平成18年度小田原市一般会計補正予算
●平成18年度小田原城天守閣事業特別会計補正予算
●平成18年度小田原市下水道事業特別会計補正予算
●平成18年度小田原市国民健康保険事業特別会計補正予算
●平成18年度小田原市老人保健医療事業特別会計補正予算
●平成18年度小田原市介護保険事業特別会計補正予算
●平成18年度小田原市病院事業会計補正予算
●小田原市屋外広告物条例
●小田原市公益法人等への職員の派遣等に関する条例の一部を改正する条例
●小田原市職員の特殊勤務手当に関する条例の一部を改正する条例
●小田原市手数料条例の一部を改正する条例
●小田原市国民健康保険条例の一部を改正する条例
●小田原市消防本部等設置条例等の一部を改正する条例
●工事請負契約の締結について（平成18年度富士見橋架け替え工事）
●訴えの提起について
●平成17年度小田原市一般会計継続費精算報告書の報告
●平成17年度小田原市水道事業会計継続費精算報告書の報告
●平成17年度小田原市一般会計歳入歳出決算ほか（全12会計）決算の認定
●小田原市立病院の診療報酬等に関する条例の一部を改正する条例
●教育委員会委員（山田浩子さん）の任命
●公平委員会委員（飯田和夫さん）の選任
●都市農業確立に関する意見書
●医療費助成制度の見直しに関する意見書
●二宮尊徳翁の偉業のさらなる顕彰施策の促進に関する決議

9月定例会の議案は、行政情報センター（市役所4階）、支所、連絡所でご覧になれます。詳しい審議の内容は、「市議会だより11月1日号」をご覧ください。

平成18年度 9月補正予算の概要

■一般会計補正予算 ［5億7，400万円追加］
■天守閣事業特別会計補正予算 ［390万円追加］
■下水道事業特別会計補正予算 ［811万円追加］
■国民健康保険事業特別会計補正予算 ［7億7，782万2千円追加］
■老人保健医療事業特別会計補正予算 ［202万5千円追加］
■介護保険事業特別会計補正予算 ［700万円追加］
■病院事業会計補正予算 ［180万円追加］

この結果、全会計予算額は、1，422億9，763万3千円となりました。主な内容は、次のとおりです。

○障害者地域生活支援事業費の計上
障害者の自立を支援するため、相談支援などの地域生活支援事業を実施します。
○屋外広告物事務関係費の計上
市景観計画重点区域を対象に、市屋外広告物条例を制定し、他の地域も県から事務の移譲を受け、屋外広告物の許可事務などを実施します。
○図書館ネットワークシステム等借上料（債務負担行為設定）
図書館と他の市施設の図書室などを結ぶ図書館ネットワーク事業を拡張するとともに、インターネットによる図書予約システムを導入します。

なお、寄附者一覧のとおり、ご寄附をいただきましたので、そのご意思を生かせるように、各基金に積み立てるとともに、事業費を計上しました。

【寄附者一覧】（敬称略）

◆ふるさと文化基金寄附金 ［57万6，400円］
▽神奈川県小品盆栽連合会▽ダンスサークルマーガレット▽湘南ステーションビル㈱▽粋成浩児▽匿名

◆防災対策基金寄附金 ［52万円］
▽原香▽匿名

◆社会福祉基金寄附金 ［8，807円］
▽昭和18年度大窪小学校卒業生

◆ふるさとみどり基金寄附金 ［26万1，201円］
▽エコライフフェア運営事務局▽㈱フジミ▽あいおい損害保険㈱▽小田原庭園業組合

◆社会教育振興費寄附金 ［16万円］
▽富士ゼロックス神奈川㈱▽富士屋ホテル㈱▽鈴木智恵子▽㈲河鹿荘▽小田原銀座クリニック▽湘南ステーションビル㈱

◆保健体育振興費寄附金 ［124万円］
▽㈱ファンケル▽富士ゼロックス神奈川㈱▽富士屋ホテル㈱▽鈴木智恵子▽㈲河鹿荘▽小田原銀座クリニック▽湘南ステーションビル㈱

楽しく参加しよう「市民活動」

あなたも一緒に

現在、市に登録している市民活動団体は、約330団体。しかし、その活動を知る機会はあまりなく、参加したくてもどうすればいいのか迷っているかたも多いでしょう。
そんなあなたに市民活動を紹介します。

問地域政策課　☎33-1708

市民活動「はづき」では、俳画を学び、老人ホームを訪問しています。俳画を通して、楽しい交流の時間を過ごしています。

市民会館４階にある市民活動の拠点、市民活動サポートセンター。団体のミーティング、作業のためのスペースや印刷機などが使えます。
https://www2.city.odawara.kanagawa.jp/ssc/odawara/

「市民活動」って何？

「社会のために、自分のできることをする」という私たちのちょっとした気持ちの表れが、市民活動の原点です。それだけに、さまざまな分野にわたります。一般に、ボランティアといわれる活動も含まれています。

市民活動の最大の魅力

実際に市民活動をしているかたは、「新しい仲間づくり」や「やりがい」、「充実感」が強く心に残るそうです。同じ目標を持ち、一つのことに向かって仲間と一緒に楽しみながら活動していることが人の役に立っているなんて、すてきなことですよね。

また、これから定年退職を迎える「団塊の世代」のかたにも、在職中に培った技術や能力を発揮する活躍の場の一つとして、「市民活動」は注目を集めています。あなたの生きがいになるかもしれません。

「何かやってみようかな」と思ったら、とにかく参加してみてください。そして、市全体に活動の輪を広げ、皆さんの力でこのまちをさらに輝かせましょう。

参加するにはどうすればいいの？

市民活動は、福祉、環境、社会教育、国際協力、子育てなどさまざま。参加したくても何がいいのか迷ってしまいます。そこで頼りになるのが、市民活動サポートセンター。各団体の情報収集・提供の場であり、市民活動の相談も受け付けています。市民活動の専門家があなたを待っていますので、気軽にお立ち寄りください。

また、市の職員による出前講座を利用して、活動内容や状況を聞くのも一つの方法です。

もっと教えて！「市民活動」

今月は、実際に活動をしているかたがたとふれあうチャンスがあります。それは「サポートセンター祭り」です。さまざまなジャンルの団体が集まり、展示、実演、体験、講座などを通して、それぞれの活動を紹介してくれるので大好評。興味のあること、不安なことは、実際に活動しているかたに聞くのが一番です。このチャンスをお見逃しなく。きっとあなたに合う団体を見つけられるでしょう。

第2回サポートセンター祭り
【日時】11月25日㊏10時～15時
【場所】マロニエ

ボランティアに感謝のしるし

ボランティアの精神は、見返りを期待しないことですが、「ありがとう」と言われると、うれしいものです。

市では、皆さんのボランティア活動に対し、感謝の意を込めて小田原市ボランティアカード（通称「まごころカード」）を交付しています。これまで約3，600枚のカードをお渡ししました。交付には申請が必要ですので、お問い合わせください。

資金不足で困っていませんか？
～市民活動応援補助金～

市では、活動資金に悩んでいる市民活動団体を後押しするため、平成16年度に「市民活動応援補助金」を創設しました。市民活動サポートセンターでも、企業や団体が募集する各種助成金の情報を提供しています。資金不足だからとあきらめないでください！

新しい時代へ

近隣市町やゆかりある都市などと、連携や交流を深めている小田原。
国の内外を問わず、そのきずなは広がり、深まっています。

区域を越える行政サービス

交通や情報通信手段が急速に発達し続けている今、生活範囲が飛躍的に広がっています。以前から広域連携をしている県西地域でも新たな取り組みを始めています。

問企画政策課　☎33-1254

西さがみ連邦共和国が建国5周年

日本有数の景勝地・保養地として広く知られ、歴史的にも深いつながりのある小田原市、箱根町、真鶴町、湯河原町の1市3町が、それぞれのまちの持つ資源や魅力を発揮し、新たな形の広域連携を提案する「西さがみ連邦共和国」。これまで中国への観光プロモーションやフィルムコミッションの設立など、観光事業を筆頭に数々の実績を残し、地域のきずなを深め、建国5周年を迎えました。

今後も、住民交流を深めるとともに、市町村合併の情報収集や研究を行い、住民の皆さんに情報を提供していきます。

フィルムコミッションでの撮影風景

酒匂川を軸にした新しいきずな「あしがら広域圏ネットワーク」

6月に小田原市、南足柄市、足柄上郡5町（中井町、大井町、松田町、山北町、開成町）で広域連携組織「あしがら広域圏ネットワーク」を設立しました。

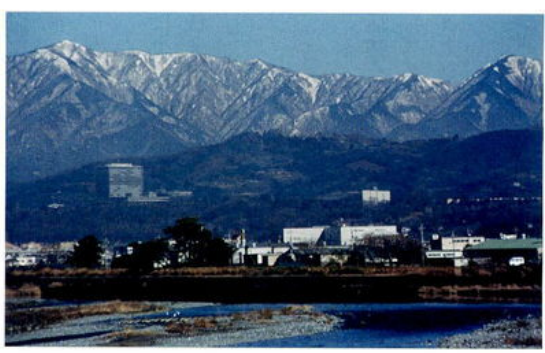
あしがら花巡りバスツアーや中学生バレーボール交流会など、住民間の交流事業を進めています。来年2月には小学生酒匂川駅伝大会も予定しています。

西さがみ連邦共和国とあしがら広域圏ネットワークの両方に加入している本市は、互いの連携を深めつつ、県西地域全体の活性化につなげる役割を果たしたいと考えています。

足柄平野を横断する御殿場線による連携

沿線の風景が美しく、多くの鉄道ファンに愛されている御殿場線。その沿線を交流の軸とした地域づくりのため、昨年8月に神奈川県、小田原市、南足柄市、足柄上郡5町、そして、静岡県小山町とともに「御殿場線沿線地域活性化推進連絡会」を設立しました。

この動きに合わせるように、沿線地域の地元商工会や団体などが協力し「ごてんばせん元気づくり推進機構」を立ち上げ、「御殿場線まつり・秋」を開きます。



■御殿場線まつり・秋
～足柄・駿河（すんが）・富士の宝巡り～

期日　11月4日㊏、5日㊐

○「駅イベント」として、山北駅、小山駅、御殿場駅で、特選市やチャリティー音楽祭、ミニSLなどを実施予定。

○「ごてんばせんオンステージ」（11月5日）は、山北駅に静岡がんセンター総長の山口健さんをお招きし、記念講演会などを行います。国府津駅や下曽我駅などでも楽しいイベントを予定しています。

※詳しい内容は、ホームページをご覧ください。
http://blogs.yahoo.co.jp/ias_gotenba/

問ごてんばせん元気づくり推進機構事務局（地域開発研究所）
☎03-5226-0161

建国5周年事業に注目！

●四季満喫・体験ツアー

「（仮題）箱根駅伝の応援旗を作って選手を応援しよう」小田原と箱根を巡るバスツアー。駅伝ゆかりのかたのトークもあります。

【期日】　12月9日㊏
【費用】　4,950円
昼食（弁当）付き。旗代は別。
【定員】　45人・先着順
【申込】　11月8日から、二人以上で。

※詳しくは、JTB小田原支店☎22-7106まで

●建国5周年記念冊子

建国記念の日の前後1週間（11月13日㊊～26日㊐）に共和国内の公共施設の一部を無料で利用できるチケットがついています。
※詳しくは、企画政策課まで

国内も海外も

広域連携、

姉妹都市・友好都市の輪が広がる

海外では、姉妹都市提携25周年を迎えたチュラビスタ市、友好都市として「ときめき国際学校」で交流を続けているマンリー市。そして、国内でも大きな動きがありました。

問文化交流課 ☎331703　青少年課 ☎331723

世界遺産のまち 日光市と姉妹都市提携へ

二宮尊徳翁の生誕の地と終焉の地という縁から昭和55年に姉妹都市となり、四半世紀にわたり幅広い交流を続けてきた栃木県今市市。今年の3月20日に周辺の日光市、足尾町、藤原町、栗山村と合併し、「日光市」になりました。

合併により、今後の姉妹都市などの提携を検討していた日光市から、旧今市市と締結していた姉妹都市提携を継続したいとの申し出がありました。本市としても、これまでの交流を継続し、また特色ある新しい市との交流は、さらなる発展が期待できることから、姉妹都市提携をすることとし、9月25日には小澤市長が「日光市合併記念式典」に出席しました。

そして、報徳サミットに合わせ、10月20日に尊徳翁ゆかりの尊徳記念館にある生家で「姉妹都市提携調印式」が厳かに行われ、交流のきずなを確認し合いました。

これからも末永く友好交流のきずなを深めることになるでしょう。

友好都市との交流は…。

姉妹都市の提携はしていませんが、交流のある「友好都市」はたくさんあります。友好都市となった理由を見ると、戦国武将の北条氏や二宮尊徳翁など、歴史的なつながりであることがほとんどです。しかし、人口が同規模で、お互いに豊かな自然、そしてお城を持つなど共通点が多いことから、友好都市となっている市があります。それは、先日の城下町都市会議にも参加してくれた岸和田市です。

「だんじり祭」で有名な岸和田市との友好関係は長い歴史を持っていて、昭和43年から始まりました。青少年の健全育成のため、ソフトボール、サッカー、剣道などのスポーツ交流、合唱団などによる文化交流、青少年指導員や子ども会、ジュニア・リーダーズ・クラブなどの団体交流を行っています。

岸和田市が友好都市であることを知ると、あの勇壮な「だんじり祭」も、身近に感じられますね。

＜日光市はこんなところ＞

日光市は、栃木県の北西部に位置し、人口は95,575人、世帯数は35,934戸(8月1日現在)。面積は1,449平方キロメートルと県の面積の約4分の1を占め、全国でも第3位の大きさです。
日光東照宮、二荒山神社、輪王寺などからなる「日光の社寺」は世界遺産に登録され、数多くの観光客が訪れる国際的な観光都市です。
また、市内の中学校が修学旅行で訪れていることでも、市民になじみのある都市です。

⬆日光東照宮

⬅鬼怒川温泉

海外の友好都市であるオーストラリア・マンリー市からは“世界最古”の樹木が届きました。それは、恐竜が生きていた約2億年前のジュラ紀からその姿を変えることなく、現代に生き続けてきた「ウォレマイパイン」です。
その苗木が、中学・高校生が交流する「ときめき国際学校」の16年にわたる友好のあかしとして、8月に寄贈されました。
フラワーガーデンの新たなシンボルとして10月8・9日の「グリーンフェスタ21」から公開しています。

地球温暖化対策地域推進計画素案への意見募集

私たちが地球を守る

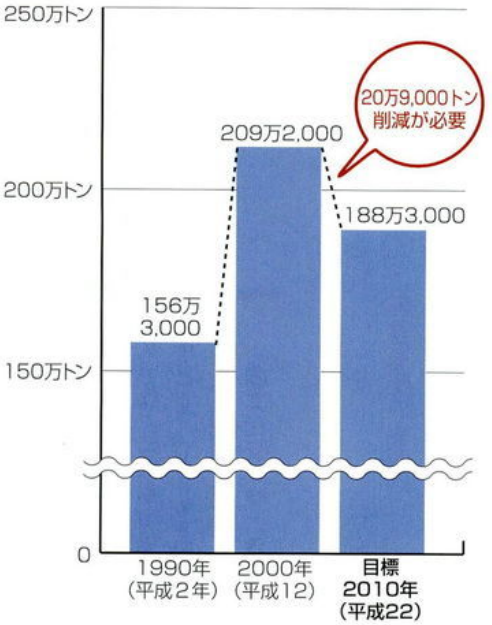
目指せ！二酸化炭素排出量10パーセント削減

市では今年、地球の温暖化対策を重点に置き「地球温暖化対策地域推進計画」の策定作業を進めています。この素案にご意見をお寄せください！

問環境政策課　☎33-1475

市の二酸化炭素排出量　削減目標

平成22年度までに
平成12年度比で10パーセントの削減を目指します。



1997年の地球温暖化防止京都会議（COP3）で採択された京都議定書が、昨年2月に発効したことにより、世界各地で地球温暖化防止のための取り組みが始まりました。

市でも、平成22年度までに二酸化炭素の排出量を平成12年度比で10パーセント削減することを目標に掲げ、地球温暖化対策に取り組んでいます。

この目標達成に向けて、省エネルギー行動の促進、低公害車の導入など、地球環境に配慮した地域からの積極的な取り組みを充実・強化するため、「地球温暖化対策地域推進計画」を策定します。

地域ぐるみで地球に優しく

二酸化炭素排出量の削減目標を達成するため、市民、事業者・団体、行政が相互に協力して、地球温暖化対策に取り組みます。小さなことでも積み重ねていくことで、大きな成果をもたらします。私たち一人一人の心掛けで地球を守りましょう！

●市民生活での取り組み
冷暖房機器の使用時間を短くするなど、省エネルギーに配慮したライフスタイルへの転換など

●事業活動での取り組み
環境マネジメントシステムの導入・実践、省エネルギー改修、新エネルギーの導入推進など

●行政の取り組み
低公害車やエコドライブの普及促進、環境家計簿の普及、ごみの分別とリサイクルの推進、太陽光発電の導入促進など

● 意見をお寄せください！ ●

環境政策課、行政情報センター（市役所4階）、マロニエ・いずみ住民窓口、支所・連絡所などで、「地球温暖化対策地域推進計画素案」を配布します（市ホームページにも掲載）。計画改訂後（平成19年4月以降）、市ホームページで、ご意見と対応状況をお知らせします。

【提出方法】
11月30日㈭までに、「素案ダイジェスト」の中の意見様式に意見・住所・氏名を書いて郵送またはファクスで。Eメールの場合は、タイトルを「地球温暖化対策地域推進計画素案に対する意見」とし、本文中に住所・氏名を書いてください。

● 地域推進計画素案などの説明会を開きます！ ●

地域推進計画素案と環境基本計画の進ちょく状況を説明します。

【日時】 11月12日㈰13:30～16:30
【場所】 中央公民館4階第2会議室
【申込】 住所・氏名・電話番号を書いてファクス、Eメールまたは電話で。

※説明会の後、環境ボランティア協会との交流があります。

〒250-8555　小田原市環境政策課
☎33-1475　FAX33-1487
Eメール　kansei@city.odawara.kanagawa.jp

歴史街道

～小田原を愛した人々 28～

平成9年度から24回連載され好評だった「歴史街道」の続編として、5回にわたって明治期以降、小田原を舞台に活躍した著名人を中心に、近代史に登場する人物を紹介していきます。（第4回）

市民劇団こゆるぎ座の指導育成に当たった北条秀司

郷土歴史家　三津木 國輝

↑北条秀司

戦前、戦後の小田原に居を構え、不朽の名作「王将」をはじめ、幾多の作品を発表した劇作家、北条秀司の文学碑が氏の七回忌で生誕百年に当たる平成十四年十月二十九日、秀司の旧宅近くの小田原文学館の庭に建立された。

当日は、芸能界から森繁久彌、緒方拳、水谷八重子、波野九里子をはじめ、各界から多数のかたが参加して除幕式が行われた。

秀司（本名・飯野秀二）は、昭和三年五月、二十六歳で箱根登山鉄道株式会社の事務課長として小田原に赴任し、国府津に居を構えたが、間もなく荒久（早川橋近く）に転居した。

その後転居を重ね、昭和八年狩野殿小路（三十二区公民館の近く）に転居した。このころ中村武羅夫の紹介で劇作家岡本綺堂に入門し、綺堂の命名で小田原北条氏にちなんだ「北条秀司」のペンネームをいただいた。

秀司は、大正八年大阪天王寺高校在学中に宝塚少女歌劇団の脚本公募に応募し、一等に当選してから劇作家を目指し、創作を続けていた。

昭和十一年、再び荒久海岸に転居、六月には綺堂主宰の嫩会に加えられ、舞台社の同人となった。これで綺堂の正式な門人になった。

昭和十二年二月、処女作「表彰式前後」が新橋演舞場で上演（新国劇・島田正吾・辰巳柳太郎主演）され、好評を博した。

昭和十四年三月、師の綺堂がこの世を去った。このとき松竹の大谷社長の勧めもあって、脚本家として生きることを決意。会社を退社して劇作に専念することとし、十一年間の小田原生活に別れを告げて東京麻布へ転居した。

しかし、第二次世界大戦の激化による東京の戦火を避けて、昭和二十年三月、箱根町強羅に疎開した。そして終戦の翌二十一年四月、再び十字三丁目（現・南町二丁目）に転居した。

小田原に移って間もなく、旗揚げ公演をしたばかりの市民劇団「こゆるぎ座」の若者たちとの交遊が始まり、長女美智留が座員であった関係から、劇団の創成期からその指導に当たった。また演技指導は秀司の紹介で、名脇役の多々良純が行った。この間、北条戯曲の名作といわれる「王将」や「文楽」などを執筆している。

また、当時小田原に疎開中の吉田晴風、西村楽天らと小田原の新民謡を作ろうと、松崎節、北条秀司作詞、吉田晴風作曲の「新小田原音頭」を赤坂小梅の歌でレコード化し、同時に北条秀司作詞、吉田晴風作曲の「小田原むすめ」も発表した。

【新小田原音頭】

一、山は湯けむり　海汐けむり
　今日も大漁だよ　相模灘
ハヤシ「みんな踊ろよ小田原踊　波もざざんと　波もざざんとヨー音頭とる」

二、お浜御殿に　箱根の屏風
　不二の雪かよ　ぬき衣紋　以下略

【小田原むすめ】

一、わたしゃ十六小田原雀
　春は雪解の城山づたひ
　北条椿の散る薮かげで
　そっと吐息をつきました　以下略

この歌は市民の心をつかんだものとして、長い間、盆踊りなどでよく踊られ、歌われていた。

昭和二十三年四月、秀司は小田原を去ったが、その後も日本演劇界の重鎮として活躍し、昭和六十二年十一月、国の文化功労者として顕彰された。

平成八年五月十九日、鎌倉の自邸で九十三歳の天寿を全うした。正四位勲二等瑞宝賞が追贈された。

↑小田原文学館にある「北条秀司文学碑」

市政だより 小田原 毎月1日発行
発行●小田原市 〒250-8555 小田原市荻窪300番地 市役所総合案内☎0465-33-1300
9月1日現在 小田原市の人口198,878人 75,416世帯【国勢調査速報値より】

連載

学校自慢！

このコーナーでは、小・中学校でのユニークな取り組みを紹介します。子どもたちの生き生きとした表情を見ると、小田原の未来も安心！という気持ちになりますね。

問教育政策課 ☎33-1671

今月号は…

下曽我小学校

（児童数：185人）

「自然ワールド」で学ぼう

自然を慈しみ、心豊かな子どもを育てるため、下曽我小学校では平成16年に学校内に、地域の自然とかかわり、愛護し、保存する活動ができる「ビオトープ」作りを始めました。その名も「自然ワールド」！

児童、保護者、教員、そして地域のかたで建設実行委員会を設置し、子どもたちの意見を最大限取り入れ、すべての学年で作業を分けて整備しました。

植樹や芝の植えつけ、砂利の小道造りのほかに、地域のかたが古井戸を掘り下げ、水量を増やしてくれたことから、水路やため池も掘りました。井戸用のポンプ小屋も造り、ベンチも置きました。

今では、すべての学年が学習の場として活用しています。季節の花や虫を探しに行ったり、その中にある花壇や畑では、ヘチマや野菜を育てたりしています。

また、池にはメダカやアブラハヤがいて、その素早い動きに子どもたちは歓声を上げています。

昨年の夏休みのサマースクールでは、「ビオトープの虫のすみか作り」という講座で、「えさ台」や「ハチ宿」を作りました。

食べ物のない冬の時期、その「えさ台」に、子どもたちは自分の家から、みかんやパンくずなどを持ってきて鳥にあげていました。このように、生命を大切にする気持ちを持った子どもが育っています。

今後もビオトープを大いに活用して、自然とかかわり、愛護する活動を進めていきたいと思います。

夏休みに魚を捕りに行き、ビオトープに放しました。
その魚は今でも元気に生きています。
ビオトープがなかったら、虫なども捕まえることができません。
ビオトープがあってよかったです。

長谷川（はせがわ） 友希（ゆうき）さん
（6年生）

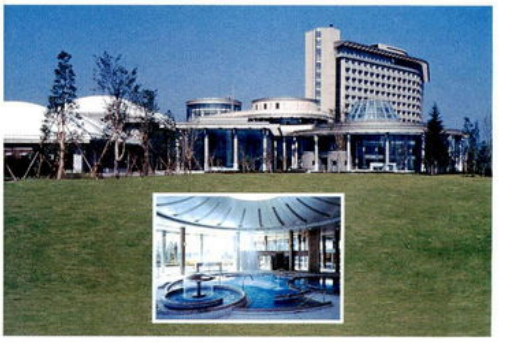
ビオトープには、虫がいっぱいいます。
学校の帰りにビオトープの前を通ると、虫の鳴き声が聞こえてきて楽しいです。
ヘチマを育てるときもビオトープを使っています。
みんなにビオトープを知ってほしいです。

橋本（はしもと） 佳孝（よしたか）さん
（6年生）

妹たちとビオトープに行って、虫や植物を見ています。
私は、虫や植物、いろいろな生物にとても興味があります。
生物を「気持ち悪い」などと言わずに、せっかく自然があるんだから、自然を知って楽しんでもらいたいです。

穂坂（ほさか） 茉友子（まゆこ）さん
（6年生）

Close Up（クローズアップ）
注目の情報をお届け！



世界が認めたヒルトン小田原

「ジャパン・リーディング・スパリゾート賞」を2年連続受賞

「ジャパン・リーディング・スパリゾート賞」は、ワールド・トラベル・アワードの一部門で、旅行関係施設・サービスに贈られる世界で最も名誉ある賞です。ヒルトン小田原リゾート&スパは、2年連続で日本最高のスパリゾートとして評価されました。

【山口英彦総支配人のコメント】

2年連続でこのような高い評価を受けたことは、ひとえに開業以来弊ホテルを愛し育ててくださった世界の旅行関連企業の皆様をはじめ、多くのお客様のおかげであると心より感謝申し上げます。今後ともこの賞にふさわしいホテルであり続けるべく、従業員一同、一層の努力をしてまいります。

市では、ヒルトン小田原リゾート&スパの財産貸付収入の一部を、市民の選択により優先順位をつけて重点配分する予算に活用しています。

問ヒルトン小田原リゾート&スパ
☎29-1000　http://www.hilton.co.jp